



大晦日の夜、大戸口からぬつと現れた異形の神の使いは地域の安寧を祈り、時には人々の行いを諭してゆきました。列島各地で伝えられている様々な来訪神がユネスコの無形文化遺産に登録されました。先人たちの想いがどのように伝えられていくか、見守りたいところです。

素晴らしい感性！

両中村家住宅での小学3年生の社会科見学

今年度実施されている小学3年生の社会科見学には、その後越谷市立弥栄小学校、草加市立栄小学校、越谷市立新方小学校が来館していただきました。前号でもその様子を紹介させていただきましたが、その後またまた素晴らしい発言がありました。

「この家の周りは、元はどうだったのですか？」

どうしてこういう視点で観られるのでしょうか。驚いてしまいました。中村家住宅を訪れて周囲のことに興味を持つことは、中学生以上でもなかなかできないことです。

古民家はそこで実際に生活が行われていた頃の周囲の環境ととても密接な関係がありました。地域の自然(地形や気候)、当時の政治、産業、地域の人々との関係や家族関係などのことが建物の造り方や敷地の様子にも表れていました。古民家の周囲にも目を配ることは、古民家の本質に迫ることになります。

従来の旧東方村中村家住宅と大間野町旧中村家住宅の共通点は次の通りです。

★南側が正面(門や式台付玄関、大戸口が南向き)になっていたこと。

★主屋と門の間に広い庭があったこと。

★敷地の周辺には水田を中心とした農地が広がっていたこと。

★住人の居住空間と接待空間があったこと。 ★敷地の周囲、特に北西面に屋敷林があったこと。 などです。

このような古民家と周囲の風景を一体のものとして捉えることで、先人たちの歩みや想いを学ぶことができると思います。「この家の周りは・・・？」という視点はこのことに繋がってきます。

この質問をした児童にどうしてこういう疑問が出てきたのか尋ねると、見学の前夜にお母さんと話していて湧いてきた疑問だったそうです。ご家庭でも見学のことを話題にいただき、ありがとうございました。

「もみ殻は何に使ったのですか？」

稲は主に食用として作られますから食べる方(=玄米)に意識が行くのは当然です。けれどもある児童は脱穀後のもみ殻に注目したのです。もみ殻が無用なものではなかったことに、この児童はどうして意識が向いたのでしょ

うか。かつてもみ殻は田んぼで焼いて灰を肥料にしたり、枕に入れたり、箱に敷き詰めて果実のクッション材にしました。もみ殻だけでなく稲穂も藁として様々なものに使われましたが(「古民家だより」No.2をご参照ください)、小学3年生がこういうものの再利用、再生利用に目が向いたことに驚くとともに、嬉しくなります。

大間野町旧中村家住宅の梁組み



「わぁ、木があるっ！」

大戸口から土間に入ったとたんに、このような感動の声をあげた児童がいました。「木」というのは太くて曲がった梁のことです。土間という広い部屋と重い屋根を、太いだけでなく曲がっているからこそ支えられるのですが、それだけに他の部材との結合はとても難しいと思います。2つとない木材をどこにどのように使うかという思想と技術は、古代の匠たちから伝えられてきたものです。

国の登録有形文化財(建造物)として答申

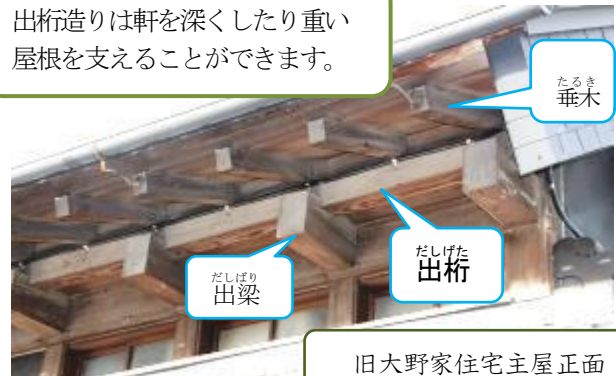
旧日光道中沿いの旧大野家住宅(主屋、土蔵)が、国の文化審議会から登録有形文化財として文部科学大臣に答申され、官報告示を経て登録される予定です。

主屋の『出桁造り』や土蔵の『牛梁』が特徴です。

小学3年生の社会科見学での言葉を見ても、古民家から学ぶことがたくさんあります。先人たちが伝えてきた知恵や技術は過去のものではなく、現在及び将来のことを考える上でも大切なことが込められています。それを私たちがしっかり受け止めるためにも、今回の答申は好い契機となるでしょう。

出桁造りは軒を深くしたり重い屋根を支えることができます。

たるき垂木



旧大野家住宅主屋正面

100年前の世界・日本、そして越谷

今年は越谷市制施行60周年ですが、さらに遡ること40年前・・・と考えると、100年前はそう遠い昔ではないような気がします。このころ世界は大きな出来事が次々と起こり、世の中が大きく変わろうとしていた時期でした。そのことは越谷の地にも影響を与えました。1918年(大正7年)は初めての世界大戦が終結した年でした。

1 スペイン風邪の世界的な流行

1918年中頃から猛烈な勢いで流行したインフルエンザです。発生源は不詳ですがニュースの発信源がスペインだったとの説からこのような名称で呼ばれたとのこと。第一次大戦末期でしたので人の動きも多く、1921年まで3回の流行の波がありました。世界で数千万人、我が国では38.5万人が死亡したとの報告があります。(内務省衛生局編「流行性感冒」東洋文庫)

市域の村では小学校で次のような対策がとられました。現代のような薬もまだなく、「出席停止」などの制度もなかったため、「可成・・・」という指示だったようです。

各教室ノ清潔通風ニ努ムルコト。痰壺ノ設備、衣服ノ清潔、寝具ノ日光消毒ノ奨励、罹病者ハ可成欠席、医療ヲ乞ハシム。罹病者ニシテ出席セルモノハ他ノ児童ト共同遊戯スルヲ禁ズル等、予防上ニ努メタリ。

(越谷市近現代資料232「大正8年 桜井 庶務部」)

2 第一次世界大戦後の状況

(1) シベリア出兵

世界大戦が終結する3か月前、当時の連合国はシベリア出兵を行いました。日本も“浦潮(塩)派遣軍”として1922年まで送りました。1918年8月12日午前1時50分、川柳村には3名の青年宛に召集令状が届き、村長はじめ主な役人が役場に集まり、当該青年宅に令状を届けたり郡役所や警察署にその報告をしました。17日には村を挙げて壮行会を催し、応召する兵士を蒲生駅で見送りました。(越谷市近現代資料235「大正7年 川柳 動員日誌」)

(2) 米騒動

米の値段は大戦の間の数年間に2倍以上になりました。戦後の工業生産進展に対して農業生産は停滞気味で、さらにシベリア出兵もあってこのようになりました。8月に富山から始まった米騒動は全国に広がりました。

越ヶ谷周辺の村の報告では「細民は物価高騰で生活が困難。農産物は高値を示していて影響は少ないといえども、衣服などを新調した人を見たことがない。」とあります。(越谷市近現代資料232「大正8年 桜井 庶務部」現代文に直しました。)また、米価暴騰が「天聴ニ達シ」て“御下賜金”を分配した記録もあります。

(3) 大正時代の風潮

以上でみてきたように1918年という年、この時期は、大きな出来事が次々と起こっていました。普選運動やロシア革命の影響もあり、政府は人々の様子を全国各地町村に報告させました。その内容は「地主と小作の関係」、「事業主と雇人の関係」、「普通選挙に関する細民の感想」、「最も多く読まれている雑誌」などです。(前掲資料)

大正期は民衆の文化が発展した時代でもあります。コロッケやオムレツが登場し、演劇も発展しました。ラジオ放送が始まり、「越ヶ谷町ラジオ同好会」が結成されました。金子みすゞが雑誌「赤い鳥」に投稿したことは有名ですが、越ヶ谷町でも文芸誌が度々発行されました。人々の表現も豊かになりました。しかし再び大戦の危機が迫っていました。